『インドへの道』　原題 *A Passage to India*　1984 年	執筆：清水　純子
制作国	イギリス、アメリカ
スタッフ&キャスト（監督、脚本家、俳優、その他）	スタッフ：監督 & 脚本 & 編集　デヴィッド・リーン/製作：ジョン・ブラボーン、リチャード・ B・グッドウィン/ 音楽：モーリス・ジャール/ 撮影：アーネスト・デイ/ キャスト：ジュディ・デイヴィス: アデラ・ケステッド：/ヴィクター・バナルジー: アジズ医師 / ペギー・アシュクロフト: モア夫人 /アレックス・ギネス:ゴドボール教授/
画像	
カラー・モノクロ	カラー
時間	163 分
ストーリー	1920 年代、英国植民地インドにフィアンセを訪ねてきた英国女性アデラ（ジュディ・デイヴィス）は、気候風土、文化の異なるインドに戸惑いながらも興味を覚える。アデラは、インドの神々の官能的に抱擁しあう仏像に刺激されて本国英国では経験したことのない官能の疼きを覚え、無意識の欲望を密かに目覚めさせる。アデラは、エリートのイギリス人フィアンセのロニー（ナイジェル・ヘイヴァース）を愛していないことを自覚し、インド人だがインテリで親切なアジズ医師（ヴィクター・バナルジ）に魅力を感じる。異国で解放感にひたるアデラは、アジズ医師にマラバー洞窟を案内してもらうが、暑さと洞窟の幻想的光景と音響はアデラの理性を狂わせる。アジズ医師に強引に誘惑されたという幻覚にかられたアデラはアジズを告訴する。アジズの無実を信じるインドの民衆は抗議運動から反英デモを展開させる。裁判では英国側の一方的で強引な審理が進行するが、突如アデラは我にかえり、アジズの暴行が幻覚であったことを認め、告訴を取り下げる。自由を勝ちとったアジズは、それまでの英国崇拝を捨てて、インドの民衆のための医師に変身する。アジズの親友であったフィールディング（ジェームズ・フォックス）は、誤解を解くためにアジズを捜しまわって再会し、新妻がアジズの敬愛していたモア夫人（ペギー・アシュクロフト）の娘であることを明かす。
時代設定	1920 年代

場所	英国植民地インドのチャンドラポア
社会背景	産業革命以降、英国綿産業を支えるために原料輸入地かつ製品販売地としてのインドは重要であった。英国は 17 世紀から 19 世紀にかけて東インド会社を設立してアジア貿易の独占権を取得した。産業革命以降、英国の綿産業を支えるために必要な原料輸入地であり製品販売地であるインドを英国は搾取し続けて暴利をむさぼった。1870 年代に東インド会社を解散させた英国は、そのかわりに 1877 年インド帝国を成立させ、インドを英国の君主が皇帝を兼ねる植民地として統治した。 　第一次世界大戦では 100 万人以上のインド人が英国軍側に参戦したにもかかわらず、英国からの重税は増し、インドはインフレに苦しめられたために、民族運動が起こり、英国は鎮圧に苦労するようになった。第一次世界大戦までロンドンは世界の都であり、英国は海運、金融おいて圧倒的優位を誇り、ポンドは世界の準備通貨であった。しかし大英帝国の経済は徐々に低迷していき、特に第一次世界大戦の 400 億ポンドの戦費は英国を債務国に転落させた。1920 年代半ばまで英国政府の予算の半分は金利の支払いに消えた。英国が世界の大国としての地位を失ったのは、政治的失敗によってではなく、経済的衰退によるとされている。
文化的背景	インドを統治するために英国は、鉄道、法整備、工業化などの先進国の技術を導入、英国によるインドの間接統治（被支配国インドの支配階級に限定的権限を与えることによって、英国支配を安定させ確立させるシステム）、同化政策（征服民である英国が被征民のインドに英国の文化と伝統を受け入れるよう強いる政策）―その一端として支配者の言語である英語をインドへ導入、結婚して家庭婦人におさまるしか居場所のない英国女性の弱い立場、女性の社会的文化的性的抑圧。
使用言語	英国英語、インドの英語、インドの言語。
テーマ	大英帝国植民地下の英国人側のタブーのいかがわしさと矛盾を暴く：１．パワー（大英帝国植民地の威光と横暴）、2.エスニシティ（征服する英国人と支配されるインド人）、3. ジェンダー（性的に抑圧される英国女性、白人女性に対する非白人男性の接触はタブー）。
みどころ	大英帝国の力を背景にインド人を猿扱いする横柄な英国人、英国人にあこがれと反発を持つインド人、人種の壁を越えた英国人とインド人の友情、抑圧された英国女性の愛と性、白人女性の非白人男性への封印された性的興味（アデラは婚約者の白人フィアンセに興味がなく、インド人アジズ医師に魅力を感じる）、異文化と暑さのための妄想と精神錯乱。
印象深いせりふ	Mrs Turton: I'll second that. He's become a proper sahib. Just the type we want, if I might say so. Mrs Moore: You know, Mr Turton, when we get settled in, we look forward to meeting some of the Indians you come across socially, as friends. Mr Turton: Well, as a matter of fact, we don't come across them socially. They're full of all the virtues, no doubt, but er, we don't.

	Mrs Turton: East is East, Mrs Moore. It's a question of culture. ・・・ Mrs Moore: This is one of the most unnatural affairs I have ever attended. Heaslop: Of course it's unnatural. Now you see. Mrs Moore: I do not see why you all behave so unpleasantly to these people. Heaslop: We're not out here to be pleasant. Mrs Moore: Ronny, what do you mean? Heaslop: India isn't a drawing room. We're out here to do justice and to keep the peace. I'm not a missionary or a sentimental socialist. I'm just a member of the civil service. Mrs Moore: Hmm. As simple as that. Heaslop: What do you and Adela want me to do? Sacrifice my career? Lose the power I have for doing good in this benighted country? Mrs Moore: Good? you're speaking about power. The whole of this entertainment is an exercise in power, and the subtle pleasures of personal superiority. Mrs Moore: God has put us on earth to love and help our fellow men. Heaslop: Yes, Mother.
授業教材用 メリット	英国上流社会のきれいな英語が聞ける。大英帝国植民地の実態が描かれている、個人の感情を越えた人種問題のむずかしさがわかる、ジェンダーと民族の問題（上流だが弱者である英国女性とエリートだが弱者であるインド男性医師）や対立、女性の性的抑圧、異人種の男性に対する白人女性の潜在的性的欲望の存在が描かれる。公的権力のいかがわしさ、大英帝国支配下のタブーが暴かれている。
授業教材用 デメリット	上演時間が長い。
映像入手元	20 世紀フォックス・ホーム・エンターテイメント・ジャパン
原作の有無	E・M・フォースター『インドへの道』
支持反応	Rotten Tomatoes 評価（批評家 85 、観客 78）
キーワード	インド、英国（イギリス）、大英帝国、植民地、異文化、異民族、気候風土、民族運動、反英感情、英国女性、性的抑圧、洞窟、ヒンズー教、裁判、精神錯乱、妄想、文化摩擦、鉄道、人口過多。

Copyright © Junko Shimizu All Rights Reserved.

★本サイトに掲載される情報の著作権は、清水純子に帰属します。
許可なく複製、改変、アップロード、掲示、送信、頒布、販売、出版等を禁止します。